

文学における北方性

神谷 忠孝

一 日本近代文学における北方

(1) 国木田独歩

「北方性」を考える道筋として、地理的、風土的な観点から日本における東北・北海道の文学の特色を考察する方法がある。もうひとつは文学的な発想であるが、「北」という字に「背く」「逃げる」「やぶれる、負ける」「北方に行く」などの意味が含まれていることに視点を置いて、敗北を覚悟した北方志向、いわば浪漫的精神を考察してみする方法がある。結果論と云えばその通りであるが、北海道にやってきた文学者に共通している傾向である。

北を目指した作家たちには幸田露伴、国木田独歩、徳富蘆花、石川啄木、岩野泡鳴、長田幹彦、葛西善蔵、有島武郎、大町桂月、鶴田知也、橋外男などがある。

先ず国木田独歩を取り上げる。国木田独歩が有名になったのは、国

民新聞社の従軍記者として日清戦争に派遣され、「愛弟通信」という手紙の形式で現地報告を新聞に連載した時からである。文章がうまいうえに戦争に対する批判もこめられていて評判になった。

北海道に来るのは明治二十八年九月である。その三カ月前、独歩が二十四歳の時に佐々城本支、豊寿夫妻と出会っている。佐々城は医院を経営していた。豊寿は学者である父に自由に育てられ、街中を男装で歩いたりするモダンな女性だった。十七歳で上京してフェリス女学校に学び佐々城本支と出会って恋愛関係になった。二十五歳の本支には妻子がおり正式に夫婦になったのは、本支が離婚した明治十九年であった。豊寿はクリスチャンであるとともに政治に関心を持ち、明治十九年にキリスト教婦人矯風会を設立して幹部として活躍する名流婦人のひとりであった。この夫妻が国民新聞社と毎日新聞社の従軍記者を自宅での晩餐会に招待した。そこで十七歳の佐々城信子と出会い、一カ月後の日記に、「吾愛恋を清く深く永く強からしめ給へ。かの少女の愛を吾に与へ給へ」と書くにいたる。

佐々城夫妻はそのころ、北海道室蘭の郊外で農場を経営して不在地主としての収入を得ていて、独歩にも北海道開拓を勧めたようである。「欺かざるの記」に、「近頃、北海道移住、農業を営み独立したしとの希望起りたり」と記している。信子との恋愛が進むうち、信子宛の手紙に「未来の妻よ」と書いたのが豊寿に見つかり激しく叱責されたことを信子は独歩に告げた。独歩は監視されている信子をつれだして北海道で二人だけの自由な生活を営もうと思いはじめる。信子宛の書簡

に、「吾れ等はなほ若し。もし忍耐してこの原野に十年を積まば、おん身はわずか二十八歳。余はまさに三十五歳にして独立自活に立派なる土地を得、且つそれ迄にすでに文学界に於いて一旗幟を建て得べし。精神界において一風潮を起し得べし。北海道この壮大偉麗なる新故郷は必ず吾れ等の為にその一角を供してこの理想をおこなわしめん」とある。

独歩が佐々城本支から結婚の承諾を取り付けて北海道に旅立つたのは二十八年九月十六日であった。二十日に札幌農学校の新渡戸稲造を訪問し、道庁にも出かけて土地選定について相談した。二十五日、空知太駅で下車し三浦屋旅館に一泊。翌日、歌志内近郊に九万余坪の土地を選定してもらい、二十七日に札幌に戻ってみると信子の父からの手紙があり、信子にアメリカ行きを勧めているという内容であった。独歩は帰京の決心をして翌日札幌を発った。このときのいきさつは小説「空知川の岸边」(『青年界』明治三五・一一〜一二)や「欺かざるの記」で描かれている。

(2) 有島武郎

次に、有島武郎を取り上げる。明治二十九年、十八歳で札幌農学校予科第五年に編入学した有島は「観想録」と名づけた日記に農業への意志を記している。(明三〇・五・六) この意志を父に伝えたかどうかは定かではないが、四カ月後に父武は「国有未開地処分法」による農地の貸し下げ出願をしている。有島は日記に、「此に我が前途に來たれる一事起これり。地積九十六万余坪、殆んど百万に垂んとす。嗚呼、これ父上が余

の為に購いし所のもにてあるなり。」と感激の文を書いている。有島の目指した農業は、小作人を搾取することのない神聖無垢な事業としての農業であった。払い下げられた土地には小作人付きであったので、父の思惑と対立し、有島の夢はたちまち挫折する。四年のアメリカ留学を経て、東北帝国大学農科大学英語講師に任ぜられた翌年の一九〇八年、狩太の農場は武郎名義となった。農場主として小作人の家を一軒ずつ訪ねるうち悩みは深まり、トルストイの「若い地主の朝」という小説を思い出したことが日記にある。

一九一四年(大正三)は有島武郎が妻の病氣療養のため札幌を去った年であるが、この年、父の意志で北海道拓殖銀行から担保流れの土地を七千五百万円で買収して第二農場としている。有島農場は四百四〇ヘクタールとなった。二年後、妻と父が他界し創作に専念するとともに、農場解放を準備しはじめている。一九一八年(大正七)、武者小路実篤が「新しき村」宣言をしたとき、有島は「武者小路兄へ」(『中央公論』大七・七)で、「未来を約束するのは滑稽かもしれませんが、私も或る機会の到来と共に、あなたの企てられた所を何らかの形において企てようと思つてゐます。而して存分に失敗しようと思つてゐます。」と農場解放を暗示している。「存分に失敗しよう」という表現が目される。

有島は約十二年間北海道に住んだのであるが、後年「北海道についての印象」(『寸鉄』大一一〇・五)で、「今までに取りとめてこれこそ北海道で受けた影響だと自覚するやうなものを持つてゐない。自分が放漫なためそんなことを考へて見たこともないのに依るかも知れないが、一つは

十二年も北海道で過しながら、碌々旅行もせず、その生活とも深い交渉を待たないで暮して来たのが原因であるかも知れないと思ふ。」と書いている。実際、札幌から北へは、父のお供で留萌に行っただけである。都会育ちで繊細な感受性をもった有島にとって未開の原生林は恐怖であったようだ。「カインの末裔」「生れ出づる悩み」などの自然描写は実景ではなく想像によるものである。アメリカ人の有島武郎研究者ポール・アンドラはその著書『異質の世界・有島武郎論』（冬樹社、一九八二・二）で、「小説を通して行なう有島の北海道への飛翔を、日本文化および社会から脱して、『自然』状態にある理想郷に入った象徴と考えてはならない。」と述べ、有島にとって北海道は「異質の世界であり、旅人の目にやさしくなつかしいものは何もない、不調和の世界である」と書いている。圧倒的な大自然を前にして無力さを自覚したことで人間の内面に目をむけたことが文学へのきっかけをつかんだと言える。

二 樺太をめざした作家たち

(1) 譲原昌子

樺太に渡った主な文学者に岩野泡鳴、寒川光太郎、小熊秀雄、本庄陸男、宮澤賢治、譲原昌子、宮内寒弥などがいる。樺太に居住した日本文学者で研究されているひとりに譲原昌子（一九二一～一九四九）がいる。作品集『故郷の岸』『朔北の闘い』（一九八五）、『闘い・女の宿』（一九八八）

の三巻が同成社から刊行されている。譲原昌子は一九一一年（明治四四）、茨城県に生まれて間もなく北海道空知に養子に出され、養父母と樺太に渡った。本名舟橋きよの、筆名はほかに鷺津ゆき。一九二四年、樺太庁立豊原高等女学校入学。一九二九年卒業し、樺太落合町の落合第二小学校に勤務。翌年父母が離婚し、母と妹の生活がきよのの肩のしにかかった。一九三三年、真岡第二小学校へ転任。このとき父母が復縁し一家で真岡に住んだ。この年に創刊された『文芸首都』（東京）に詩を投稿。翌年父死亡。一九三六年から鷺津ゆきの筆名で雑誌『樺太』十二月号に「闘ひーフユの略歴」、翌年二月号に「闘いー母の記録」を発表、これを全面的に改稿したのが「朔北の闘ひ」（『文芸首都』昭和十四・二）で、第九回芥川賞の候補カードに載った。一九四〇年母死亡。この年、鷺津ゆきと同姓同名の人がいたため譲原昌子と筆名を変えた。一九四一年、十二年間の小学校教員依頼退職し、翌年妹を連れて上京、本格的に作家生活を目指したが結核を患い、一九四九年一月二十四日に清瀬の東京療養所で亡くなった。行年三十七歳。作品の多くが樺太取材作である。

譲原昌子の作品集三巻を通読して感ずることは、上京前の作品のほうが水準は高いということである。書きたいことを書けた樺太時代の作品に価値がある。作品は大きく三つに分類できる。一つめは「朔北の闘ひ」に代表される樺太のもの。二つめは「抒情歌」に代表される自伝的作品。三つめは「故郷の岸」「ツンドラの碑」などの教師ものである。なかでは樺太を描写した「朔北の闘ひ」がすぐれている。書き出しはこうである。

「生まれ故郷ばかりが国でねえ。世の中あ広い」と、故郷に見切りをつけた人々が、ぼろい一攫千金を夢みては、海霧の深い宗谷海峡を魚族のように渡ってくる頃であった。帝政露西亜時代、本土を追放された露人の流摘地であった樺太島は、領有後既に第一期創始時代を経て自由移民時代——森林黄金時代の波へ乗りかけていた。フユ達一家が、所謂しよっぱい河二つ——津軽海峡と宗谷海峡——を越えて島へ渡つて来たのはちょうど此の頃、フユが六つ、大正六年四月であった。

続いて船内の描写があり、樺太に夢を馳せる家族、食いつめて流れてきた人間、ジャッコ鹿と呼ばれる流れ者集団などの様子が各地の方言を交えるかたちで描かれる。フユの眼を通して挿入される風景描写は作者の原風景であろう。

(2) 寒川光太郎

寒川光太郎は一九〇八年一月一日、父菅原繁蔵と母スエの長男として北海道留萌で出生。彼の父は山形県で生まれた。小学校の代用教員となり、一九〇一年北海道に渡った。一九一二年、上川支庁の安平志内小学校校長となる。

光太郎は一九二一年、サハリンへ渡った。父がサハリンの栄浜郡落合町字深草にあった小学校校長になったからである。光太郎は一九二二年、

大泊中学に入學した。

一九二三年三月、光太郎は一学年を終了したあと東京の順天中学校二学年に編入した。第一回のサハリン居住は一年半であった。その年九月、関東大震災に遭遇し光太郎はサハリンの自宅に戻る。一九二四年、札幌の北海中学校入學。一九二七年、北海中学の四年を終了し法政大学英文科に進み二年後に中退。中国の大連に渡つて新聞記者をした。日本の戻り東京で喫茶店を営んだりした。

光太郎がサハリンに戻つたのは一九三二年である。このとき父は教員をやめて豊原の樺太庁博物館の囑託であった。光太郎は館員として父の研究助手をつとめた。父繁蔵は独学で植物学を研究していた。二十八歳の光太郎は父が採取した植物を鉛筆で下図を描いたものに実物を見ながら色つけをする仕事を手伝い、三万点を越える植物図鑑の完成に尽力した。一九三七年に寒川光太郎は上京して巖松堂につとめ『樺太植物図誌』(一九三七〜一九四〇)の編集に当たった。一九三九年に創刊した同人誌「創作」に発表した「密猟者」によつて第十回芥川賞を受賞して作家への道を進みはじめた。受賞直後、菊池寛のはからいで満州視察にでかけている。やがて太平洋戦争がはじまる直前の一九四一年十二月十日、陸海軍報道部はドイツのCCP部隊を模倣した文学者の徴用を実施発令し、東南アジア各地へ総勢八十人あまりの文学者を派遣して文化工作に従事させた。

私が「南方徴用作家」というテーマに取り組みきつかけになったのは、一九八一年から一年間、国際交流基金からの派遣でインドネシア大学で

日本文学を教えたことである。大学の図書館に柳田泉の『海洋文学と南進思想』（ラジオ新書、一九四二・一一）や、寒川光太郎の『インドネシアの酒壺』（東亜書院、一九四四・一二）などがあつた。国立図書館に日本語新聞があることもわかつた。帰国してから資料収集がはじまり、今では全国に三十人ぐらゐの研究者を擁するまでになつてゐる。

寒川は一九四二年、海軍報道班員として東南アジアに徴用され多くの作品を発表。一九四四年に再徴用でフィリピンに派遣され米軍捕虜となり一九四六年十二月に帰国した。戦後はフィリピンの日本兵士遺骨収集に奔走し、国会で遺骨収集問題が論議されるころまで漕ぎ着け、『遺骨は還らず』（一九五二）を刊行した。創作活動に復帰することもかなわず、四度目の妻の実家がある広島などで暮らしたこともあつたが、晩年は不遇のまま、一九七七年一月二十五日、六十九歳で他界した。寒川の生涯は北方に文学の源泉を見出しながら、戦争に翻弄された悲劇を象徴していると思う。

（3） 寒川のサハリン取材作品

寒川の文学を概観すると、サハリン取材作にみるべきものがある。サハリン取材作には身辺の肉親、知人を扱った短編、『海峽』『流水』などの歴史小説がある。「神話」はオロッコ族（現在はウィルタという）に取材した作品。「流水」はサハリンに足を踏み入れたサンダー人と日本人の話。「苔桃の丘」は樺太の樵夫の物語。「漂流記」はカムチャッカに

取材した作品。

注目されるのは『サガレン風土記』（一九四二）である。「サガレン風土記」は南樺太がサガレンと呼ばれていた時代、ロシア流刑植民地に入植した知識人について小説風に書いた作品。北欧の土壤学者≒博士が流刑地サガレンをおとずれた。ワシリエフ監獄長が囚人に鞭打ちの刑をするのをやめさせようと忠告したため、数日間獄に入れられる。博士はサガレンに農業を定着させようと努力する。本国に帰らないという博士に監獄長が八人の囚人を鞭打ちの刑にしようとした時、博士は知事の書類を見せる。それは、八人の囚人を開拓要員としてよいという許可書であつた。

（4） 先住民族の問題

近代文学の中のアイヌ像は、幸田露伴「雪紛々」（『読売新聞』一八八九）、中条百合子「風に乗つて来るコロポックル」（一九一八年執筆、発表は没後の一九五〇年）、秋田雨雀「国境の夜」（『新小説』一九二〇・一〇）、長見義三「母胎より塚穴へ」（『小樽新聞』一九二九・一一―一二・八）などで扱われている。長見義三は北海道生まれの作家で最初にアイヌ取材作をてがけた人である。一九〇八年、小樽に生まれた長見は小樽中学在学中の一九二四年に母が日高管内の穂別で料理店を開き、卒業後三年ほど穂別で暮らしているときアイヌ人たちと親しくなつた。一九二八年に札幌にでて勤めながら大学受験をめざし

ているとき、小樽新聞三十五周年記念懸賞小説募集の広告を見て応募し、一等に当選したのが「母体より塚穴へ」（この作品は神谷忠孝編『姫鱈』札幌・響文社、一九九三・一〇に収録）である。この作品は、アイヌ差別や日本人技師とアイヌ娘との恋を扱っている。長見義三はその後早大仏文学科に進み、在学中に「ホッチャレ魚族」（『文芸』一九三五・七）で認められた。単行本に、『姫鱈』（砂子屋書房、一九三九）、『別れの表情』（宮越太陽堂、一九四〇）、『燃ゆる告白』（春陽堂、一九四二）、『アイヌの学校』（大観堂、一九四二）などがある。一九四二年以後は北海道に住み、『ちとせ地名散歩』（北海道新聞社、一九七六）、『白猿記』（同、一九七七）などを刊行し、一九九四年四月二十一日、八十五歳で他界した。

鶴田知也の「コシャマインの記」（『小説』一九三五・二）が翌年に芥川賞を受賞したことは、アイヌ民族が文学の題材として注目される契機となった。この小説はユーカーラの伝承に材をとりコシャマインの和人と

の戦いと死を叙事詩的文体で描いている。

中野重治の「アイヌ学校と民族の問題」（『自由』一九三七・一一）は、中山新次郎の「アイヌ学校」（『新土』一九三七・一〇）をとりあげている。同化を拒みコタンに帰ってゆくバチェラー八重子に共感し日本の同化を強制する植民地政策を批判した評論。戦後は武田泰淳の「森と湖のまつり」（『世界』一九五五・八〜一九五八・五）、石森延男『コタンの口笛』（東都書房、一九五七・一二）などが発表されたがアイヌを滅びゆく民族として描いた点にアイヌ人から批判が出た。

アイヌ人の文学には、バチェラー八重子『若きウタリに』（東京堂一九三二）、遠星北斗（本名滝次郎）『コタン』（希望社、一九三〇）、森竹竹市『原始林』（ピリカ社、一九三七）、鳩沢佐美夫『遺稿若きアイヌの魂』（新人物往来社、一九七二）、江口カナメ『歌集アウタリ』（新泉社、一九七四）、萱野茂『おれの二風谷』（すずさわ書店、一九七五）などがある。

サハリンの先住民族については最近、北海道大学文学研究科から『オタスーサハリン北方少数民族の近代史』（ニコライ・ウイシネフスキー著・小山内道子訳）、『サハリンのウイルタ』（タチャーナ・ローン著）、『サハリン北方先住民族文献集―文芸作品篇一九〇五―四五』（青柳文吉編、菊池俊彦序）の三冊が同時出版された。この中の文芸作品篇を見ると、野口雨情、北原白秋、深田久弥、正宗白鳥、前田河広一郎、林房雄などがサハリンを旅行しオタスを訪れていたことがわかる。ほとんどの文章が少数民族を「土人」と呼び文明に遅れているという視点で観察記が書かれている。中では寒川がウイルタの古老からの聞き書きを記録している「神話」が、偏見も先入観もなく、読ませる。短編集『流水』（高山書院、一九四一・二）に収録された「神話」の書き出しはつぎの通りである。

オロッコ族がシベリア平原からサハリン（樺太）島へはるかなる漂白の旅路をたどつたのはいつの頃であつたらうか、時を超越したその古い悠久の歴史は知るよしもないが、サハリン島第一の大河ボロナイ川の上流の佳き緑の地に達して住居をつくつたとき、一族を

ひきいてきたのは徳望あつしユニという族長だつたといはれてゐる。

三 北海道生まれ作家の風景描写

(1) 久保栄

島木健作は「北海道と文学」(『北海道帝国大学新聞』昭和一〇年一月一五日)で次のように書いている。

北海道を描くといえ、従来人々はその地方色に心ひかれた。アカシアといい、エルムといい、鈴蘭といい、雪といい、熊といい、アイヌといい——そういう言葉の持つ何か甘い感情にひかれて、遠く内地から札幌の学舎に行李をといた学生も多い。監獄部屋といい、鯉場かせぎというがごとき血のしたたる労働も、何か浪漫的なひびきをもつて人々の耳には聞こえているのである。かかる仮面ははがされなければならぬ。生活のはげしいたたかいのすがたが、正しいリアリズムの見地からとりあげられ、これがほんとうの北海道の姿であると、すべての人々の前につきつけられなければならぬ。この大きな仕事を、我々の作家でなくて誰が一体なしうらうというのだろうか。

(北海道文学全集より)

北海道育ちの作家の多くは有島武郎の「カインの末裔」や「生れ出づる悩み」の影響を受けている。小林多喜二の「不在地主」(『中央公論』一九二九・一一)をはじめとして、本庄陸男、早川三代治などの作品に見られる風景描写に有島文学との類似性が見られる。そうした中で独自の自然描写をきりひらいたのは久保栄だった。

久保栄『火山灰地』(第一部は昭和十二・十二、第二部は十三・七、雑誌『新潮』)

——たとへば半弦の月のやうに／年の半ばを冬に蝕まれ／残る半弦を、春と夏と秋とが／あわただしく染め分ける北日本の四季。

夏のころ／或る日は雲ひとつなく晴れて／平原の屋根をつくる火山脈の／山肌のほてりさへ身近にせまり／ゴム輪にはずんで畑へ鞭うつ馬の背も／シャボンのやうに泡立つころよさ／或る日は、また、重くたれた雲の臉が／真夏に、ふと、冬の死顔をうかべて／耕地にちらばるこぼれ陽のつびとつを／無慈悲に消してゆく曇り、そして雨／そのさだまらない晴曇のもと／雑草をとり合剤を撒く手のひまにも／病虫と立ち枯れの二重の予感におびえ／二百十日の暦をめぐつて／始めてつく農民のため息のやうな秋風。

秋風は／背よりも高い玉蜀黍の／あかいひげを吹きなびかして海から来る。／穫り入れた。／部落部落は、色めき立つ。(第二部幕開きの朗読) 新潮文庫 昭和二七・一

(2) 上西晴治

上西晴治は一九二五年一月七日、十勝管内浦幌町に生まれた。浦幌高等小学校を経て札幌師範付設の小学校准指導養成所に進み、一九四二年に卒業して十勝管内西足寄の国民学校教員となる。二年後、小樽の北海道青年学校水産教員臨時養成所に学び、一九四五年三月に卒業して塩谷村立青年学校に勤めたがすぐ召集を受けて入隊。九月に復員し、増毛、札幌、銭函などの中学校で教えるかたわら札幌文化専門学院夜間部に通って文学に目覚めた。一九五一年、大東文化大学文政学部日本文学科三年に編入学し一九五八年卒業した。

大学の卒業論文に有島武郎を選んだことで岩内に木田金次郎を訪ね、木田金次郎をモデルにした八木義徳の「漁夫画家」(「文学界」一九五二・一〇)を読んで共感し小説を書きはじめた。一九五三年から札幌の高校で国語を教えながら創作を続け、一九六四年七月、「玉風の吹く頃」で読売短編小説賞に入選。「オコシツプの遺品」(「文学展望」一九七七・二)で芥川賞候補、「ニシパの歌」(「文芸」一九七七・九)で直木賞候補となる。『コシヤミンの末裔』(筑摩書房、一九七九)で北海道新聞文学賞を受賞した。伊藤整文学賞を受賞した『十勝平野』上・下(筑摩書房、一九九三・二)は、それまで書いてきた作品の集大成ともいべき大河小説である。アイヌ民族の興亡を正面から扱ったこの小説は真の意味での北海道的な文学であると同時に世界に紹介したい日本

文学と言える。

第一部・落日篇は明治期の北海道でアイヌが次第に追い詰められていく様子が描かれている。オコシツプという狩りのうまい若者がいる。弓矢のかわりに鉄砲を手にいれたいと奔走するのだがなかなかうまくいかない。父レウカは強制労働でクナシリに連れていかれたまま四年も音沙汰がなく、そのうち死んだと聞かされアイヌ式の葬式を盛大にやる場面が丁寧に書かれている。シャモ(和人)は馬や牛を導入して農地を拡大し、アイヌの犬が野犬となって子牛を襲ったという口実でアイヌが頼みとする猟犬も殺される。

第二部・抵抗篇は、食糧難からオコシツプが牧場の子馬を殺してたべる場面、大熊との闘い、鮭の密漁などが描かれる。結婚して生活も軌道に乗った矢先、オコシツプが日本人によって殴り殺される様子が描かれている。

第三部・苦闘篇は、オコシツプの子供周吉一家が十勝太から昆布刈石に移った一九一五年から三十年ぐらいの様子が描かれている。周吉は牛を飼って貯金をため土地も手に入れて成功していくが、馬四十頭を日本人に毒殺されたりする。戦争がはじまると、帝国軍人になることを喜ぶアイヌとアイヌ独立をめざすふたつの流れができる。周吉の長男は二十歳で死亡し、一家の未来は次男の孝二に託される。

第四部・新生篇は、孝二が東京の私立大学を卒業し、札幌で高校の国語教師をしながら小説を書きはじめる話を中心に、孝二の眼から見たアイヌ問題が浮かびあがるように書かれている。孝二の受け持ちの生

徒にアイヌの少年がおり、差別をうけてぐれていくのを見た孝二は、生徒を呼んで「実は僕もアイヌなんだ」と話す。孝二は母から身分をあきらかにしてはいけないといわれていたのだが、戒めを破ったわけである。これに対し生徒は「先生は卑怯ものだっ」と反発し学校をやめトラックの運転手になると宣言して去る。孝二は衝撃をうけながら、アイヌの復権を目指す運動に立ち上がることを決意する。孝二の考えかたが出ているのは次のような場面である。

「アイヌ差別なんか、今どきあるはずがないよ」と、和人たちは平気で言う。しかし、この手でいつも煙に巻かれはぐらかされて、相手の正体さえ見失ってしまうのだ。

こんなずいシャモをやり込めるには、やはりアイヌが貧困から抜け出して、堂々と「独立」を主張しなければなるまい、とつくづく思った。

気がつくくと、孝二は札幌の街を通り抜けて郊外を歩いていた。しかし、踵を返した彼は、なお考え続ける。「文学だつてそうだ」と呟やいた。遠星北斗の書いた『吾れアイヌ也』も、森竹筑堂の書いた『原始林』も、バチラー八重子の書いた『若きウタリに』も、みんな、スズラン香る谷間に、静かに消えゆくアイヌの悲しい歌だった。孝二は「さびしく消えて、それでいいわけがあるもんか」と呟やく。

対雁文雄（退学した生徒）も、観光協会に勤める若者も、ミーも、

悲劇の元は貧困だ。孝二にとつて、貧困から抜け出すことと「独立」とは別個のものではなかった。

この孝二の呟きは作者の真情であるとともに、アイヌであることに誇りを持ち、アイヌ文化を継承して世界に広めようと努力しているアイヌの人にも共通するものであろう。

地里真志保がモデルと考えられるつぎのような場面がある。

敗戦からちょうど一年が経った。

二、三日降り続いた雨が上がり、朝から西風が唸りをたてて原野を吹き抜けていた。家内じゅうの者が家の前の畑で玉蜀黍の穫り入れをしているところへ、突然アイヌの人が訪ねてきた。四十年配の小柄な男で知尾真佐雄と言った。頬髭が濃く、眼は深く落ち窪んでいて、ぶ厚い唇を突き出すようにしてしゃべる。知尾は札幌に本部のある「ウタリ協会」の者だが、「アイヌ差別廃止」と、和人に取り上げられた「給与地返還」の件で、GHQに歎願書を提出することになったので署名簿に名前を連ねて欲しい、と言った。

周吉は聞きながらとうとう動き出したと思うと、気が昂ぶってきつじつとしてはいられなかった。

「『ウタリ協会』はどんなことをする集まりなんだい」と、周吉が訊いた。

「ウタリ(同胞)が協力しあつてお互いの生活を向上させようという、戦前からある団体なんです」と、知尾は言った。

「酷いアイヌ差別があつたり、アイヌの人間問題があつたりしてんのに、少しもよくならねえのはどうしてなんだい」

周吉は知尾の顔を覗き込むようにして、ふたたび言った。

「もう何十年も前から交渉してきたんですが、真面目に取り合つてはくれなかつた。だから、こんどはOHEに頼んで見ようと思つて」

知尾は唇を噛みしめた。

「アメリカ人だから、こんどこそ公平に裁いてくれるかもしれない」と、周吉は思った。

周吉は字が書けなかつたので、孝二が代わつて署名した。止若、本別、高島、池田など、各地方の同胞たち百人ほどの名前が載つている。歎願書はアイヌを解放し、ごまかして取り上げたアイヌの給与地を返して欲しい、といった意味のことを切々と訴えていた。

「金があつても教養がなければ駄目だ」

周吉はうらめしげに歎願書を眺めた。

「もっと横の繋がりを持たないと、強力にはなりません。早く北海道全域の組織を作りたいものです」

知尾は思い詰めたように言つて、帰つて行つた。(五十二)

昭和二十三年四月、孝二は浦幌高等小学校当時の担任の先生のすすめで、札幌師範学校に併設の小学校教員養成所に入所することに

なつた。彼は食糧不足の街の暮らしは不安だつたが、勉強がしたかつた。

孝二は出発の朝、甲高い流月の嘶きで眼をさました。

「流月もおまえの首途を祝福してくれてんだよ」

サトが朝食の支度をしながら言つた。

孝二は厩の流月に話しかけ、牧柵づたいに十勝川の方まで回つて馬たちに別れを告げた。

日高山脈はまだ厚い雪におおわれ、朝夕は冷えていて吐く息は白かつた。

放牧地は青い新芽を吹いていたが、十センチ下は堅く凍っていた。馬耕までにはまだ十日はかかるだろうと思つた。(五十二)

上西晴治には短編小説集として、『ポロヌイ峠』(風濤社、一九七二)、『原野のまつり』(河出書房新社、一九八二)、『トカプチの神子たち』(潮出版社、同)がある。これらは久しく絶版となつていたが、『上西晴治短編全集』(風濤社、二〇〇四)が刊行されて読めるようになった。十勝地方のアイヌ民族を一貫して題材にしている。北海道に生まれ、アイヌの側にたつて書き続けている作家は例をみない。「ポロヌイ峠」に登場するフキ婆さんは、アイヌの子供たちを集めて、和人がアイヌ民族を圧迫してきた歴史を語り伝えている。日本の敗戦に触れて次のように言う。

ええ気になって、しまいに遠い外国の方まで手を伸ばしたべえ。
どうなったと思う。

——どっこい柳の下さどじょうばいるもんけえ、こんだあ反対にア
メリカとかロスケにさんざん叩きのめされてしまったね。とうとう
アイヌの罰があたったちうわけよ。

フキ婆さんのこの言葉はアイヌ民族だけでなく、日本に侵略されたア
ジア諸国の民衆の声でもある。上西晴治の文学は北海道の辺境から世界
を視野にいれて日本の近代を告発しているのである。ここに、真の意味
での北海道的な文学が成立している。